

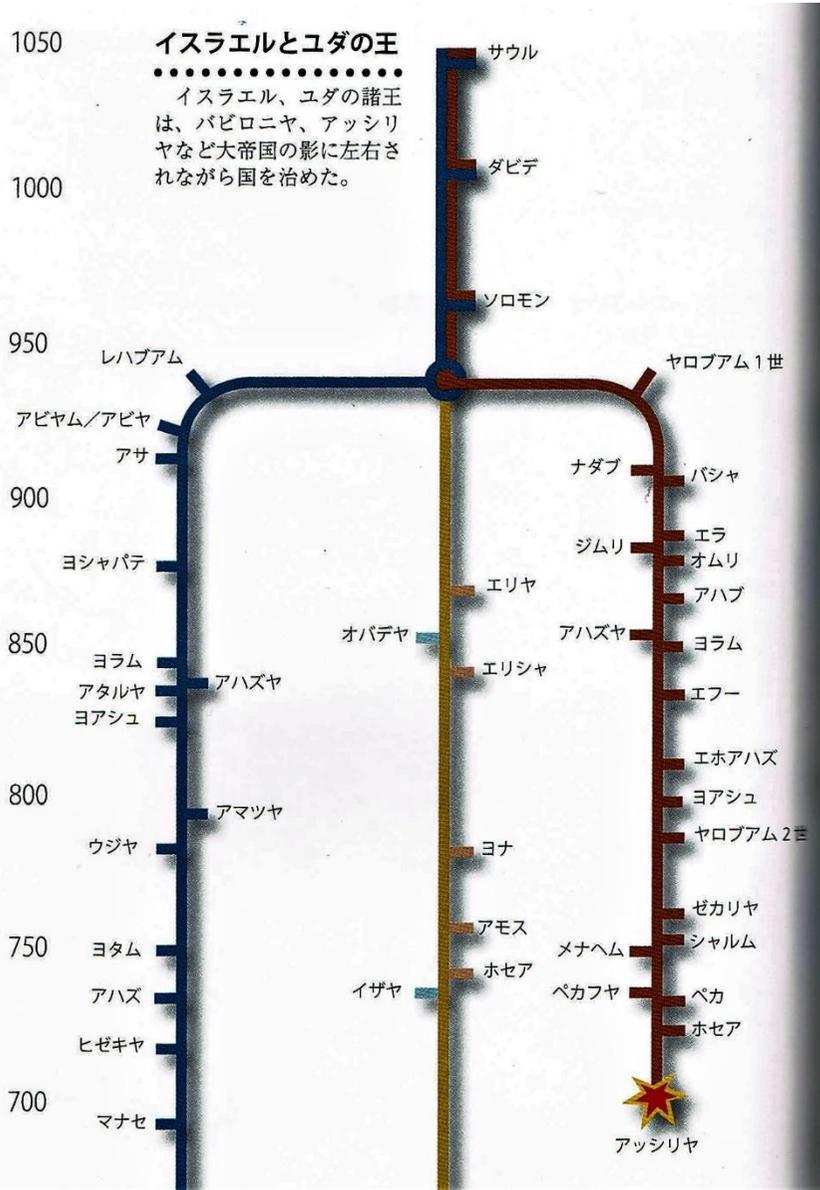
先週は 9 章 27~37 節を通して、南王国ユダの王アハズヤと、北王国元王アハブの妻イゼベルの死の出来事を見ました。イスラエルとユダのバアル信仰の元締めのような女性の死の様は壮絶でありました。

1. エフーの作戦 (1~4 節)

- ①アハブの子たち (1) 「アハブにはサマリヤに七十人の子どもがあった。エフーは手紙を書いてサマリヤに送り、イズレエルのつかさたちや長老たち、および、アハブの子の養育係たちにこう伝えた。」アハブの血を受けた男子は 70 人でした。エフーはサマリヤの諸方に手紙を記しました。宮殿のあるイズレエルのつかさ達、長老達、それからアハブの養育係たちに以下のように伝えたのです。
- ②エフーの勧め (2~3) 「この手紙が届いたら、あなたがたのところに、あなたがたの主君の子どもたちがおり、戦車も馬も城壁のある町も武器もあなたがたのところにあるのだから、すぐ、あなたがたの主君の子どもたちの中から最もすぐれた正しい人物を選んで、その父の王座に着かせ、あなたがたの主君の家のために戦え。」その内容ですが、手紙が届き次第、手紙を受けた人達に主君の子弟がいて、戦車や馬や城壁や武器があるのだから、適切な人物を選んで、主君の家のために戦う準備をせよ、というものでした。これは相当の脅しです。戦いの態勢を整えて、エフーに立ち向かうなら立ち向かえ、という言葉です。
- ③イズレエルの重鎮たちの恐れ (4) 「彼らは非常に恐れて言った。『ふたりの王たちでさえ、彼に当たることができなかったのに、どうしてこのわれわれが当たることができようか。』」しかし、その手紙を受けた人々は恐れました。なにしろ、イスラエルの王ヨラムが打たれ、ユダの王アハズヤも敗走してついに殺されてしまったのです。彼ら以上の強者は自分たちの中にはいないというわけです。

2. エフーの妥協ない攻め (5~7 節)

- ①イズレエルの重鎮の反応 (5) 「そこで、宮内長官、町のつかさ、長老たちおよび、養育係たちは、エフーに人を送って言った。『私どもはあなたのしもべです。あなたが私どもにお命じになることは何でもいたしますが、だれをも王に立てるつもりはありません。あなたのお気に召すようにしてください。』」イズレエルの要諦である宮内長官、町のつかさ、長老たち、養育係たちは、エフーに平伏して、「私たちはあなたのしもべです」「あなたの命令通りにします。」「当方は王を立てません。」「あとはあなたの思う通りにしてください。」。全面降伏です。
- ②エフーの再度の手紙 (6) 「そこで、エフーは再び彼らに手紙を書いてこう言った。『もしあなたがたが私に味方し、私の命令に従うのなら、あなたがたの主君の子どもたちの首を取り、あすの今ごろ、イズレエルの私のもとに持って来い。』」そのころ、王の子どもたち七



十人は、彼らを養育していた町のおもだった人たちのもとにいた。」それを聞いて、エフーは改めて手紙を記しました。「本当に味方になり、命令に従うというなら、あなたがたの主君の子どもたちの首を取れ。」「それを明日の今ごろにイズレエルの私のもとに持ってこい」。背筋が凍えるような内容でした。妥協なしの命令した。

③王の子どもたち達を殺し (7)「その手紙が彼らに届くと、彼らは王の子どもたちを捕らえ、その七十人を切り殺し、その首を幾つかのかごに入れ、それをイズレエルのエフーのもとに送り届けた。」しかし、その命を受取った人々も、時を移さず王の子どもたちを捕らえて殺したというのです。70人がこのことで命を落としました。彼らは、その首をいくつかのかごに入れて、イズレエルのエフーのもとに届けたのです。いずれの国にあっても、国の絶対権力者は親族であろうと、妥協なく抹殺することがあります。もちろん、ここではアハブの家の一族を滅ぼすという意味でありましたが、ただ人間的に読めば残酷だということになりましょう。

### 3. エフーのなしたこと (8~11節)

①子供たちの首を (8)「使者が来て、『彼らは王の子どもたちの首を持ってまいりました』とエフーに報告した、すると、彼は、『それを二つに分けて積み重ね、朝まで門の入口に置いておけ。』と命じた。」イズレエルの使者達は、エフーの所に来て報告しました。「彼らの子どもたちの首をもって来ました」。エフーは「それらを二つに分けて、積み重ね、朝までは皆の目の止まる門の入口に置いておけと命じました。見せしめです。

②謀反を起こしたのは私 (9~10)「朝になると、エフーは出て行って立ち、すべての民に言った。『あなたがたに罪はない。聞け。私が主君に対して謀反を起こして、彼を殺したのだ。しかし、これらの者を皆殺しにしたのはだれか。だから知れ、主がアハブの家について告げられた主のことは一つも地に落ちないことを。主は、そのしもべエリヤによってお告げになったことをなされたのだ。』」朝になりました。エフーは人々が集まる門の入り口に行きました。そして、緊張する彼らの気持ちを察したのか、「あなたがたに罪はありません。」「主君ヨラムに謀反を起こして、殺したのは私だ。」「しかし、よく考えよ。これらの者を皆殺しにしたのは誰だと思うか。主なる神御自身です。」「良く知りなさい。アハブの家について告げられた主のことは一つも地に落ちません。主は預言者エリヤを通して、「アハブの生きている間は、わざわざ起こさない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわざわざ下す」(I列王 21:29)などの言葉は、決して無効になったわけではなかったのです。

③アハブの家の最期 (11)「そして、エフーは、アハブの家に属する者でイズレエルに残っていた者全部、身分の高い者、親しい者、その祭司たちを、打ち殺し、ひとりも生き残る者がいないまでにした。」エフーは結果として、アハブの家に属する者で、イズレエルにいた者達、身分の高い者、アハブ家と親しかった者。バアルの祭司たちを殺しました。

《結論》私たちが歴史上の武将の本を読むとします。例えば、源頼朝についてとします。すると、頼朝がいかに妥協なき方法をもって、自分の周りの者たちをも抹殺するという出来事にぶつかります。そうすると、そこから彼の批判を恐れることのない行動から学ぼうとするかもしれません。翻って、このところ、第二列王記に出てくるエフーについて読む時も、彼の行動から、なんとかして何事かを学ばんとする心が働くかもしれません。確かに、彼は油注ぎを受けて王とされる道が開かれると、あとは目的に向かってまっくら。特にアハブ王のバアル信仰を一掃するという目的を得ると、何の妥協もなく、事を進め、相手がたを完膚なきまでも叩きのめしている光景をみえています。今朝の記事でも、イズレエルの地にいるアハブの血を受けた70人の子たちの命を取り、それをイズレエルの門に持って来いという、今日では決して赦されないだろうという方法をもって、相手がたを滅ぼそうとしています。

そこで大事なことは、私たちは聖書を読んでいて、このような場面に当たった時に、その方法ややり方から学ぼうとする必要はないということです。学ぶべきことは、その中において、神がその出来事のなかで、何を語らんとしているかに、関心を向けていくことが大切なのです。

ここでは、エフー自身がこのことを語っています。彼は門の前にたち、語りました。『あなたがたに罪はない。聞け、私が主君ヨラムに謀反を起こし、彼を殺したのだ。しかし、これらの者たちを皆殺しにしたのは誰か。』と言って、これらの残酷とさえ思われる事も、神から来ているのだと述べます。その上で、『だから知れ、主がアハブの家について告げられた主のことは一つも地に落ちることはないということを』。そして、『これらは預言者エリヤを通して、主が言われたことが実現したことなのだ』とも述べています。

これを単に、エフーは自分の行動を自己正当化していると読むか、それとも神はエフーという荒々しい人物を用いて、アハブ以来のバアル信仰、アシエラ信仰を、イスラエルの民の中から一掃するために、このことをなされたかどかでしょう。そして、神はかつて預言者を通して語られた言葉を、「一つも地に落とすことない」とされた、お言葉を受け入れていくかどうかでありましょう。

今日の倫理観でいえば、エフーの行動は受け入れられないでしょう。また、それをさせた義なる神についても理解に苦しむかもしれません。しかし、今ここで、このまま行けばバアル信仰などにイスラエルが席卷され、創造主なる神への信仰が消滅してしまうという事態であるとすれば、神はエフーという人物によって、ことをなし、神のさばきのお言葉は地に落ちることがないということ、私どもに知らせんとしていると読むことができます。

私たちは、エフーを批判するよりは、エフーと同じほどに汚れている自分に目を止めることです。『君なるイエスよ。けがれし我を、洗いきよめて、恵みをたまえ。わが日、わが時、わがもの皆は、今よりとわに、君のものなれ』(讃美歌 339の1)。私たちの心の中には、憎しみが潜んでいるとする。主イエスは、それは殺人と同じだと言われます。その心の事実を神の前に告白していくことが、私たちにとって最も大事なことなのです。